ドングリからコメへ
―淡海の弥生文化は水辺から始まった―

はじめに

淡海の弥生文化はどのような場所で、どのように始まったのでしょうか。弥生文化は、現代の主食のコメが淡海で最初に栽培された文化です。まさに琵琶湖や近江国(現在の滋賀県)を指す淡海という言葉の通り、滋賀県最初の弥生のムラは琵琶湖の傍から営みを始めました。そして、田を作り、稲を育て、徐々に内陸の縄文のムラと交流を深め、淡海の弥生文化が県内各地へと広がって行きます。弥生文化は今までの縄文文化から、どのように変わったのでしょうか。出土遺跡や遺物から明らかにしていきます。

1．淡海に弥生文化がやってきた

淡海の弥生文化の始まりは、今から約2,500年前に始まります。この頃、遺跡の多くは琵琶湖岸や水の豊富な場所に造られます。では、なぜ、そのような場所に造られるのでしょうか。それは、縄文文化にはなかった稲を栽培し、コメを食するようになったからです。稲の栽培には、田に水を引くための豊富な水が必要です。現在のような掘削機械はもちろんのこと、金属製の掘削道具もなかった時代に水路や田を作るのは大変でした。だから、弥生人は、最も労力が少なく、田ができる琵琶湖畔を選んでムラを造りました。

最も古い弥生ムラである草津市烏丸崎遺跡は、琵琶湖に嘴状に突き出す烏丸半島にあります。この遺跡では、県内最古の弥生時代前期の竪穴住居が見つかっています。また、野洲市湯ノ部遺跡では、ほぼ同時期の掘立柱建物が見つかっています。最初のムラは、小規模で縄文時代の終わり頃のムラの大きさとさほど変わらないようです。

その後、高島市針江浜遺跡や守山市赤野井浜遺跡や小津浜遺跡では、杭列(柵)や溝あるいは、自然の小川などを巧に利用し、ムラを区画するようなムラも出現します。この頃のムラの大きさは約4～500㎡程度であることが判っています。兵庫県神戸市大開遺跡では、人工的に掘削した溝で囲まれた初期の環濠集落の大きさが約1,200㎡で、淡海の弥生のムラの３倍程度の大きさであることから、田んぼを介してムラが近接し、協力して稲を育てた可能性が考えられます。

琵琶湖岸の弥生遺跡（守山市赤野井浜遺跡）

弥生時代前期のムラ跡（高島市針江浜遺跡）

6．弥生人が食べたもの

縄文時代も終わり頃になると、淡海の縄文人も雑穀を食べていたことが近年わかってきています。近江八幡市竜ケ崎Ａ遺跡では、縄文土器の内面に炭化したアワが付着した例や、近江八幡市上出Ａ遺跡から出土した縄文土器には籾痕やアワやキビといった雑穀の痕が残されています。こうしたアワやキビは、元々日本にはなかった雑穀で、イネと一緒に伝わったと考えられます。弥生時代前期末の彦根市稲里遺跡ではコメとアワ、キビ、クルミなどが出土し、長浜市川崎遺跡では、炭化した稲穂が出土しています。

このような遺跡の出土例から弥生人はコメ以外にも雑穀や木の実を食べたことがわかります。一方で、弥生土器には、籾痕が付着しているものも多くあり、弥生土器とコメは切っても切り離せない関係にあるようです。

炭化稲穂（長浜市川崎遺跡）

籾痕土器（野洲市湯ノ部遺跡）

7．木製農耕具と漁網用の土錘の登場

狩猟採集の縄文時代には、丸木舟や弓、石斧の柄、容器、櫛などが木を材料として作られていました。弥生時代になると水田の耕作のための木製農耕具が作られます。田を耕すための鍬や鋤などが主なもので、鍬は身の部分と柄の部分を別々に作り、組み合わせて使い、鋤は組み合わせ式と一本の木から身も柄も作るものがあります。針江浜遺跡や近江八幡市大中の湖南遺跡では、鍬の柄を通すための穴が開いていないものや切り離されていない段階の作りかけの鍬が出土し、他の遺跡でも穴が開いていない鍬が出土しています。

守山市赤野井浜遺跡では、鍬は少なく、卓球のラケットのような形に中央に２孔を穿った組み合わせ式の鋤が多く出土しています。これらの農耕具は用途によって使われる木が違っています。鍬は広葉樹のアカガシ亜属の木が使われ、鋤は針葉樹のスギが使われています。弥生人は稲の栽培と共にこうした農耕具に使う木を管理しているのです。

また、約2,300年前の弥生時代前期の終わりには、海の文化に伴う漁網用の錘である土錘が瀬戸内海から淀川を経由して伝わります。このように滋賀県の弥生文化は、琵琶湖やその周辺の水辺を中心に始まり、稲作を基本として道具や技術を高めながら、内陸部へとムラを拡大して行きます。

上：木製の鍬と鍬未成品
下：木製の鋤（守山市赤野井浜遺跡）

土錘
（守山市赤野井浜遺跡）

埋もれた文化財の話 42
令和3年（2021年）10月
編集・発行　滋賀県埋蔵文化財センター
〒520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732－2
TEL（077）548－9681 FAX（077)548-9682
E-mail shigamaibun-center@guitar.ocn.ne.jp
URL　http://www.shiga-mc.sakura.ne.jp/

こうした初期のムラはどのような道具を持っていたのでしょうか。湖南の烏丸崎遺跡、湯ノ部遺跡、湖北の長浜市川崎遺跡などの出土遺物から壺・甕・鉢・高杯などの土器、稲の収穫具である石包丁や木を伐採する太形蛤刃石斧などの稲作と共に大陸から伝わった大陸系磨製石器、縄文文化から受け継いだ土掘具の打製石斧などが初期弥生人の道具であることが判ります。また、高島市針江浜遺跡からは、朝鮮半島の壺を意識したような少し形のかわった土器も出土しています。

２. コメと共に土器が変わった

縄文文化の主食はドングリ、クリ、トチなどの木の実でした。縄文人は近隣の森に実ったドングリ等を採集し、時には、イノシシやシカを狩猟して生活しました。こうした生活で用いられた主な土器は、深鉢と呼ばれる煮炊き、貯蔵、埋葬用の棺としても用いられるすべての用途をこなす万能の器でした。

これが弥生文化の土器は、コメを食すのに合わせて貯蔵用の壺と煮炊きに使わわれる甕というように用途に応じた土器が用意されるようになります。なぜ用途別の土器が作られたと判るのでしょうか。

それは、甕だけに煮炊きに伴う煤が付き、壺には煤の付着は認められないからです。縄文文化から弥生文化へ、それは、万能の土器から用途に応じた土器の使用への変化なのです。

弥生時代はじめの土器
（左３個が壺、右４個が甕、中央が鉢　　高島市針江浜遺跡）

３. 縄文時代終わりのムラの道具箱

弥生文化では、土器が用途別に使われるという変化が見られますが、他の道具はどうでしょうか。縄文時代終わりのムラの道具箱を見ることとします。

東近江市麻生遺跡では、住居跡や石器の製作場所、墓、柱穴などと共に土器や石器が出土しています。

土器は深鉢がほとんどで、ごく僅かな浅鉢が認められます。石器はドングリ等を割ったり、磨り潰したりするための磨石とその台となる石皿、地面を掘るための打製石斧、シカやイノシシを捕獲するための矢の先に付ける石鏃、祭りに用いられる石棒、ナイフの役目をする石匙等、狩猟採集に対応した道具ばかりです。先に見た弥生のムラが持つ道具には、森を切り開くための大きな磨製石斧やイネの収穫用の石包丁は見られません。逆に弥生のムラからは、狩猟用の石鏃やドングリ等の加工用の磨石は認められません。このような生業や道具が変わると、動物とのかかわりも変わります。縄文人は、狩猟の助手であった犬が死んだ時、埋葬しますが、稲作を行う弥生人は、犬を埋葬することをしなくなります。

縄文時代終わりの石器
（左　磨石・石皿、中央上　打製石斧、中央下　石匙、
右上　石棒　右下　６個が石鏃　東近江市麻生遺跡）

４. 縄文のムラと弥生のムラの交流

淡海で最も古い弥生のムラである烏丸崎遺跡では、大阪の生駒山西麓から持ち込まれた壺が見つかっています。こうした壺の存在は、稲作が大阪湾周辺から淀川沿いに北上し、烏丸崎遺跡に伝わった可能性を示唆するものと考えられます。

琵琶湖畔で造られた弥生のムラと既存の縄文のムラはどのように交流したのでしょうか。近江八幡市上出Ａ遺跡、彦根市松原内湖遺跡、甲良町尼子遺跡から弥生のムラと縄文のムラの交流の証が見つかっています。松原内湖遺跡や尼子遺跡では、竪穴住居跡から縄文土器と共に弥生土器の壺が出土し、上出Ａ遺跡では、縄文土器の深鉢と一緒に弥生土器の壺が出土しています。

弥生人が縄文ムラを訪れた時に携えた壺
（近江八幡市　上出Ａ遺跡）

これらの遺跡は、縄文土器が多数出土することから縄文人が生活を営んだムラと考えられます。僅かに認められる弥生土器の壺は弥生のムラから持ち込まれたと考えられます。煮炊き用の弥生土器の甕が認められないことから、弥生人は稲やコメを入れた壺のみを縄文のムラに持ち込んだのではないかと考えられます。

５. 新たな布の制作と伝統の装身具・祭祀具

弥生時代になって新たに布も作り始めます。淡海では、この時期の布の発見はありませんが、糸を紡ぐための紡錘車と呼ばれる錘が新たな道具として加わります。紡錘車は、径５cm前後の円盤状の形の中心に孔を穿った石製もしくは土製で、孔に棒を差し込み、その棒に繊維をはめ、回転させて繊維を撚り糸を作るものです。こうした新しい技術とともに、弥生時代の初め頃には、縄文時代から受け継いだ祭祀具の土偶や装身具の土製勾玉などもあります。

土製勾玉
（野洲市湯ノ部遺跡）

土偶の腕？　赤彩
（野洲市湯ノ部遺跡）

紡錘車（上：土製　左下：石製　野洲市湯ノ部遺跡
右下：石製　草津市烏丸崎遺跡）